過去の新聞記事（１）

読売新聞　2010年(平成22年)7月7日(水曜日)

連載「性暴力を問う」第3部　奪われた笑顔　読者の反響　下

性暴力を問う

苦しみ生きてきた　あなたは勇者

＜どんな性的虐待を受けたか聞かれたら、全部答えられるくらい、脳裏に焼き付いています＞。数十年前、高校時代に男性教師から被害を受けたという男性は、便せん7枚に、苦しい胸のうちを書き連ねていた。

被害について、誰かに話したり、相談したりしたことはなかったという。

＜でも、一生の秘密として墓まで持っていくのは同じもならない。もし私の経験が同じような境遇の人の力になれば＞

そして、同じ被害に苦しむ「仲間」へのメッセージをつづった。＜どうか自分自身の体も心も大切にしてあげてください。こんなつらい思いをしても自分は生きている。これは本当にすごいことだと、自分を励ましてください。苦しみながら生きてきた性被害者の皆様は、勇者です＞

■

先輩からのレイプ、自慰行為の強要――。連載で紹介した男性被害者の体験について、＜男性の方もこんなひどい目に遭っているのだと、がく然としました＞と大阪府の30歳代の主婦。＜子どもが同じ被害に遭ったら、と思うと怖くてたまりません＞と記す一方で、＜この連載は読むのがつらいです。でも、読まなきゃいけないと思います。私たちにできることは何か、考えたい＞と締めくくった。

読むのがつらい　でも読まなきゃ

男性も被害　驚き、励まし

50歳代の女性も＜ショックを受けました。これからは他人事ではなく、被害者の方がなるべく生きやすいように、また新たな被害者を出さないように性暴力に関心を向けなければ＞とつづった。

男性被害者への励ましも。46歳の女性は＜本当に偉かったね。頑張ったね。心の傷は深いと思いますが、これからは幸せになって下さい。人の何倍も何倍も＞と言葉を寄せた。

◇

多数のお便り、ありがとうございました。引き続き、性暴力を巡る司法制度や支援対策の課題などを取り上げていきます。ご意見や情報をお待ちしています。

（性暴力問題取材班）

ご感想を〒330-8551（住所不要）読売新聞大阪本社社会部「性暴力問題」取材班へお寄せ下さい。ファクスは06・6361・0733、メールはstop-rape@yomiuri.com宛です。

性被害を乗り越えて生きる男性サバイバーとして、講演会や自助グループを通じて活動する玄野武人さんの話「男性被害者の存在は知られつつあるが、まだ社会の偏見は根深く、ひとり苦しみを抱える人は多い。もし、被害の相談を受けたら、しっかり話を聴いた上で、『話してくれてありがとう』『君は悪くないよ』と伝えてほしい。日本の強姦罪は被害者を女性に限っているが、レイプの定義を広げた欧米と同様、男性を含めるように早急に法改正してほしい」

新潟新聞　2011.10.17

男性の性被害 実態知って

性犯罪被害者は女性が圧倒的に多い。強制わいせつ事件などでは男性もいるが少数だ。刑法の強姦（ごうかん）罪は被害者を女性に限定。男性は被害者として理解されにくく、長い間苦しむ人もいる。当事者らは「実態を直視してほしい」と訴えている。

街頭での強制わいせつの被害者（2011年）

	総数	20歳未満	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
認知件数	4217	2281	1515	287	106	21	7
男性	55	49	4	2	0	0	0
割合（%）	13	12	0.1	0	0	0	0
女性	4162	2232	1511	285	106	21	7
割合（%）	98.7	52.9	35.8	6.8	2.5	0.5	0.2

（警察庁調べ）

自分否定、長く苦しむ

外国では性別問わず対策

東京都内に住む40代男性は高校生の時、喫茶店で中年の男性と知り合い、「家に来ての好きなレコードがたくさんあるよ」と誘われた。男性の自宅に行ったところ、酒を飲まされ、意識がもうろうとしている中で性交を迫られ、暴行された。そのことを友人に相談したが、「ばかなことやったな」とからかわれるだけで、「次第に自分が再びされたように感じ、自分自身が嫌になった。その後何十年も苦しみました」と話す。

玄野さんも子ども時代、性被害者対策に取り組む市民グループ「性暴力ー性被害の経験がある。

「自分を否定してしまう」と話す。

性被害者対策に取り組む市民グループ「性暴力ー性被害の経験がある。

2001年からインターネットで男性の性被害相談などを行っている玄野武人さんは「一般的に男性の性被害は『ありえない』と言われてはずがない」と思われており、『被害者も』『自分は男じゃない、欠陥がある』と思い込んでいる。

39歳の時に突然、被害体験がよみがえり、心的外傷後ストレス障害（PTSD）と診断された。「性被害の電話相談にかけても『男性のことは分からない』と言われ、絶望的になった」。当時は男性被害者を含め、性別を問わず、性被害者に基本法を。ひとびとコラボ21」の辻耕作さんによると、英国、フランス、ドイツ、スウェーデン、米国などでは、強姦の被害者を女性に限っていない。「性的少数者を含め、性別を問わず、被害者を支援していくことが大切と思います」と話す。

料がほとんどなかったため、女性の被害者向けのものを自分なりに解釈して読んだ。「読みながら1年半泣き続けた。そのうち自分を大事に思えるようになりました」

性被害者対策に取り組む市民グループ「性暴力ー性被害の経験がある。その中で強姦罪の成立要件を「女子に対する暴行」と定めていることについては、被害者の性別を問わないことを支持する意見も多かったが、「数が多い女性の保護を優先するべきだ」という誤解もあり、「被害者の性別を今後の取り組み課題とした。

玄野さんは、社会が性被害に「正しい知識を持って被害者を支援していくことが大切と思います」と話す。

性被害者の権利擁護、支援強化が整いつつあります」と話す。

一方、日本では、政府の有識者会議「女性に対する暴力に関する専門調査会」が7月、刑法改正を柱に性犯罪をめぐる提言をまとめた。その中で「女子に対する暴行」と定めていることについては、被害者の性別を問わないことを支持する意見も多かったが、「数が多い女性の保護を優先するべきだ」という誤解もあり、「被害者の性別を今後の取り組み課題とした。

玄野さんは、社会が性被害に「正しい知識を持って被害者を支援していくことが大切と思います」と話す。

性被害者の権利擁護、支援強化が整いつつあります」と話す。

一方、日本では、政府の有識者会議「女性に対する暴力に関する専門調査会」が7月、刑法改正を柱に性犯罪をめぐる提言をまとめた。その中で「女子に対する暴行」と定めていることについては、被害者の性別を問わないことを支持する意見も多

読売 2015.12.14
（くらし医療）

性的虐待・DV被害 女性だけじゃない

男性も抱え込まず相談を

読売 2015.12.14

性的虐待などを受けた男性が悩みを打ち明けられる、数少ない相談施設が神戸市中央区にある。運営するのは、カナダでカウンセラーの経験を積んだ山口修喜さん（38）。開設から1年たつが、性被害を受けた男性の心のケアを専門とした窓口は珍しく、関西だけでなく、九州や東北などからも相談があるという。（辻阪光平）

オフィスの名前の由来になった愛犬・ポムとともに、カウンセリングについて語る山口さん＝神戸市中央区で＝桜田恭弘撮影

昨年12月に、山口さんが自宅に開いた「カウンセリングオフィスPomu」。誰にも言えず、ひとり苦しんできた男性たちの思いを受け止めて、不安を鎮め、リラックスするコツなどを伝える。現在、生活保護受給者も含め、20～60歳代の15人を継続的にケア。学生時代など過去に受けた性的ないじめの被害に苦しみ続ける人も多いという。

山口さんは、「こうした場合、一最近になってようやく、一部の女性被害者団体が、男性を受け入れるようになってきた段階」と話す。

玄野武人さんは、「男は被害に遭うわけがない、遭っても傷つくはずがない、たとえ傷ついても支援はいらない、という意識が社会に根強くある」と指摘。山口さんの取り組みについて、専門の相談施設の存在が、社会の認識を変える一とにもつながるはず」と期待を寄せる。

心のケア施設 山口さん「ひとりで闘わないで」

配偶者や恋人からの暴力（DV）など、性暴力の被害を受けた男性も確実に存在している。刑法は、強姦罪の被害者を「女子」に限定しているが、警察庁資料によると、昨年起きた強制わいせつ事件（6807件）の2％の被害者は男性だ。

また、性暴力やDV被害者のために内閣府が昨年2～3月に初めて実施した無料電話相談「パープルダイヤル」でも、女性からの相談1万3789件に対して、男性からも1378件が寄せられた。

被害者の中でも、男性は「少数派」のせいか、ケアの必要性が認められにくい。

玄野さんは、「男は被害に遭うわけがない、遭っても傷つくはずがない、たとえ傷ついても支援はいらない、という意識が社会に根強くある」と指摘。山口さんの取り組みについて、専門の相談施設の存在が、社会の認識を変える一とにもつながるはず」と期待を寄せる。

社会の認識変える契機に

昨年12月に、山口さんが自宅に開いた「カウンセリングオフィスPomu」。誰にも言えず、ひとり苦しんできた男性たちの思いを受け止めて、不安を鎮め、リラックスするコツなどを伝える。現在、生活保護受給者も含め、20～60歳代の15人を継続的にケア。学生時代など過去に受けた性的ないじめの被害に苦しみ続ける人も多いという。

山口さんは、「こうした場合、一最近になってようやく、一部の女性被害者団体が、男性を受け入れるようになってきた段階」と話す。

玄野さんは、「男は被害に遭うわけがない、遭っても傷つくはずがない、たとえ傷ついても支援はいらない、という意識が社会に根強くある」と指摘。山口さんの取り組みについて、専門の相談施設の存在が、社会の認識を変える一とにもつながるはず」と期待を寄せる。